



いのりとまつり

理事 平石知良

「好奇心のかたまり」・「鵜の目鷹の目」・「物見高いは人の世の常」と私達の性癖を表す言葉が数多くある。その上、「井戸端会議」・「人の噂も七十五日」・「他人の不幸は蜜の味」とか情報をイジクリつづける癖もある。「隣の芝生は緑」と言うからには、洋の東西人種を問わず同じ性癖である。「遊びやせんとて生まれけり」・「人類は遊ぶ動物である」のように生命の維持になんら関わりの無い事を、危険を冒してまで実行する。これも、好奇心のなせる業なのだろう。文化がスタートして伝播して行く過程を考えると、各地に展開するグループ同士の接触の多さに驚かされる。青森の縄文遺跡から糸魚川の翡翠が発見されたり、四国西南部の同時代の遺跡から発掘される黒曜石は全て大分の姫島産であったりして、古代人が広範囲に行動していた事に驚かされる。文化の伝播は、静かな

水をたたえる泉の中央に小石を投込んだ時に生じる波をモデルに説明されていた。しかし、伝播の速度はもっと速くしかも強力で広範囲なのである。人々の文化への要求がある点を越えようと、遠く離れ離れのグループであっても同じ行動をとりはじめる、と言う理論もある。私は、もつと原初的に「鵜の目鷹の目」で観察し続ける人々によって文化は伝播していったと考える。「鵜の目鷹の目」は私達の文明を支えた、重要な好奇心であったと考えるのである。話の順番が違っていた、新しいものが作り出すであろう福音に対して食欲であり、群れと言う集団の動向に敏感に反応しようとし続けた結果が、好奇心という性癖を私達にもたらしただけだ。まつりは、いのりである。まつり、祭り、祭りの数々の祈りの内容があるだろう。その数と同じだけの祈りの方法も、必要な時に執り行っていた祈りも、恒常的な定期的な時期に数種類の祈りの方法で行われるようになって現代に伝わってきたのだろう。

祭り、この言葉には神への感謝の意味合いを感じる。神様を里に連れ出して豊かな様を見てもらう、社の庭や周りで稔りへの感謝を、又、社殿では踊りが奉納されている。

依頼とか願望とかではなく感謝である以上、荘厳であるとともに華麗であり豪華であることが求められたのだろう。

現代日本の「祭り」の原型は、「祇園祭」に求められるという。

「博多祇園山笠」という祭りが福岡にある。五月の連休前後に櫛田神社の神事の一つとして、山笠という山車を飾りそして氏子たちが肩にかつぎ早朝の町を疾走する。

これと同じ祭りは、九州各地にあった。「写し」とよばれていた。しかし、今残るのは福岡だけらしい。確かに「飾り山」と呼ばれる山車は、「祇園祭」の山車のように華麗である。

では「博多祇園山笠」は、「祇園祭」の写しなのか。そうではなく、「祇園祭」を受け入れる下地があったから「博多祇園山笠」が生まれ今日までの伝統を護り続けてきたのではないのか。受け入れる下地が充分な充実

を持ち得なかった地域では、祭りは失われる。

文化についても同じ事が言える。水稲の文化の前は、田芋の文化だったろう。この田芋の圃場が沖繩地方にまだ残っている。

それは、水田そのものであり水路の管理等々水稲栽培に極々近いものである。つまり、田芋から水稲への移行は速やかに行いえたであろうと推測できる。水稲栽培が可能なのに、何故田芋の栽培は現在まで残っているのか。

「沖繩地方の神事では、米でなく田芋を神と共食している」からではないのだろうか。

「イワクラ」についても、その必要性と重要性に立脚した鶴の目鷹の目好奇心が、全国各地に「イワクラ」を建設して行ったのではないのだろうか。

では共有しうる必要性と重要性は、何なんだろう。

「水」の蛇口としての「イワクラ」については、少し触れた。星座を写す、磐の裂け目からさす日の光で時を知る、カレンダーの役目もあるだ

ろう。あるいは、地磁気が変化している場所かもしれない。癒しの場所があるいは、重要な決断をする場所か。

大自然の息使いの中で生きてきたし・生きて行く私達は、大自然の荒々しさを常に忘れている。荒々しさを忘れさせてくれる利便性の豊かな時に生きている。しかし、この防御網は完璧に見えて完全ではない。もともと巨大な嵐や地震は、明日防御網を築々と乗り越えて私たちを襲う事があっても、大自然の行動としてはなんの不思議でもない。

過酷な自然と向き合いながら生きていた古代の人々は、襲い来る災難を未然に察知するために、災難が起らないように大自然を鎮めるために、大自然と共存するために、「イワクラ」をつくったのかもしれない。

払暁、声明が消えた。大自然の猛威を軽減するために、環境を悪化させてまで利便性を追及し行く行くは、そのために死滅するのか・あの切り離された黒潮の魚たちのように、私たちはそれほどまでに愚かだったのか。祈ることで、大自然と共存しよ

うとした人たちを嗤うことができるのだろうか。過去の論理で現在を生きる事は不可能である。しかし、私たちは彼らに学ばねばならない、少なくとも環境を悪化させなかったノウハウだけでも。

遊びのために旅行をする。知らない事を現地で実感として知る事は、大切な事である。

人々の暮らしについても、宗教についても、見たり触れたり参加したりするだろう。

現代文明から切り離された場所であろが、絢爛と咲き誇る栄華の中心であろが、そこに生きる全ての人々は、連綿と続く文化と文明の中で育った方々である。そして、私たちも私たちの文化と文明の中で育ってきた。願わくば、好奇心や鶴の目鷹の目や遊び心を、お互いの文化と文明に向けていただければ、と。

了